お馬の話

――幼兒に讀み聞かせる爲に――

東京高等師範學校講師
陸軍騎兵中尉　白根孝之

一、兵隊さんとお馬

お馬と言へば、皆さんは、長いサーベルをつって、拍車、金ボタン、肩章をキラ〳〵させた騎兵の兵隊さんの、勇ましい姿を思ひ浮べるでせう。けれども、兵隊さんと一緒にお國のために働らいて居る馬は、騎兵のお馬ばかりではありません。お馬は砲兵や、輜重兵や、工兵の兵隊さんにとつても、なくてはならない大切なお友達なのです。砲兵といふのは大きな大砲をもつて、遠くの方からドカーン〳〵と敵を打つて、味方の歩兵や、騎兵や、工兵を助ける兵隊さんで、その大砲を引張つて行くのは大ていお馬です。大砲の中にも大きなのや小さなのがありますが、大きなのは車へ積んで、四頭も六頭ものお馬がエンヤラ〳〵引張つて行きます。けれども、そんな大きな大砲は、廣い道の通つて居るところか、平たい原ッぱしか通れません。道のないお山や、凸凹のひどいところで戰爭をする時には、小さい大砲をお馬に脊負はせてもつて行きます。又大砲の彈は何十貫もする重いのがあります。これも車に積んだり、脊負つたりしてお馬が運んでくれます。

輜重兵といふのは、澤山の兵隊さんが戰爭をする時に、お腹がひもじくならないやうにと、後からお辨當を運んでやつたり、鐵砲や大砲の彈が足りなくならないやうに屆けてやる兵隊さんです。「腹がへつては戰が出來ない」と昔から言つて居りますが、戰爭や演習の時には、兵隊さんは汗にまみれ、泥んこになつて、クタ〳〵にくたびれるほどに

飛び廻りますから、こてもお腹がへるのです。皆さんも戰爭ごつこをした後などでは、きつこお母さんにおやつをねだるでせう。けれども兵隊さんは鐵砲だこか、重い背嚢だこか、彈だこか、又近頃ではガス・マスクだこか、戰爭に要るものを一杯からだに着けて居ますから、何日分ものお辨當などはこても持つて居れないのです。又鐵砲や大砲の彈にしても、一ぺん戰爭をしてドカン〳〵、ボン〳〵こ打つて失へば、直ぐ無くなります。そこでさうしたものを屆けてやるのが輜重兵の兵隊さんで、やつぱりお馬の力を藉ります。

工兵こいふのは、皆さんがよく御存知の爆彈三勇士、あれは工兵の兵隊さんです。河を渡つて敵を攻めて行く時など、淺い河だつたら、歩兵の兵隊さんはドン〳〵飛び込んで渡りますが深い河は、重い荷物を持つてはこても泳げるものではありません。そんな時に工兵は直ぐさま橋を架けて、他の兵隊さんを渡してやるのです。又敵が攻めて來られないやうに味方の陣地の前へ鐵條網を張つたり、あべこべに、敵の陣地の前の鐵條網をプツ〳〵に切つて、味方を攻めて行き易いやうにしてやるのも工兵です。それにはソーツこ敵陣地の前に忍んで行つて、丈夫な鋏で針鋼を斷ち切ることもありますが、鐵條網が頑丈に出來て居て、容易に切れないやうな場合には、爆彈でやるのです。三勇士が自分達の體もろ共、敵の鐵條網を粉碎した、忠義な、勇ましい話は、皆さんよく御存知ですね。それはこも角、かうした橋を架ける材料や、爆藥などの重いものを運ぶのは矢張りお馬です。

その他、歩兵でも偉い將校はお馬に乘つて指揮しますし、機關銃だこか、歩兵砲——これは歩兵が持つて居て、敵の戰車だこか、機關銃だこかをやつつける爲めの小さい大砲です——などは、やはりお馬が脊中に載せて行きます。

けれどもなんこ云つても一番勇ましいのは騎兵ですね。數千の騎兵が廣い野原一杯にひろがつて、氷のやうな刃を拔きつれ、ワーツこばかり敵に襲ひかゝる有樣は、全く皆さんに一度見せてあげたい。全く太平洋の怒濤のやうです。その他、騎兵は味方のずーつこ先きの方へ出て、敵の有樣を探つたり、又、お使になつて大事な命令や報告を、

遠方に居けたりするのが任務です。

これでお馬といふものが、兵隊さんにとつて、どんなに大切なお友達であるかゞわかつたでせう。皆さんの中には、なんだいお馬なんか、今では、飛行機や自動車が發達してゐるから、ヨチ〳〵お馬でなんかやつてた日には、戰爭なんか出來るもんか、とお馬を輕蔑する人があるかも知れませんが、――誰です、さうだ〳〵なんて相槌をうつのは――、ごうして〳〵。なる程飛行機はブーンとばかりに、一時間に百キロも二百キロも飛んで行つて、高い空の上を裕々と廻りながら、上から見下して偵察することが出來ます。その點ではとてもお馬に乘つた騎兵なんか、逆立ちしてもかないつこありません。けれども、皆さんはまだ飛行機に乘つたことはないでせうが、飛行機の上からは山も野原もみんな一樣に低いところに見えて、そんなにはつきりと地上のものがわかるものではありません。敵が深い森の中にでも入つてゐたら、勿論わかりつこありません。それに近頃は、皆さんの知つてゐるやうに、戰車や裝甲自動車は芋蟲のやうな僞裝といふものをやつて、高い空の上からでは草や土とちよつと見わけがつかないやうな工夫をしてゐます。兵隊さんもさうです。帽子や背嚢の上に被つてゐる網がそれです。で、こまかい地形や敵情の偵察――例へは、この河は歩兵が渡れるかどうか、この道は大砲の車が通れるかどうか、あそこの陣地にはどんな仕掛けがしてあるか、あそこの森の中には敵がどの位居るか、などゝいふことは、どうしても騎兵の斥候の力を借りねば、わからないのです。又、自動車にしても、大きな道の通つてないところではなんにもならないでせう。そればかりではない、タイヤがパンクしたり、エンヂンに故障が出來たり、又敵が逃げる時に道を壞したり、大きな障碍物を置いたりした場合には、切角の自動車もエンコして失はねばなりません。そこへ行くとお馬は平氣なものです。山でも河でも、ころばぬやうに、ですからね。

そこで兵隊さんにとつて、これほど大切なお馬、皆さんがみんな好いて下さるお馬に就いて、おぢさんの知つてゐるだけのことをお話して上げませう。と言つても、おぢさんは騎兵ですから、ほかの兵隊さんのお馬のことはあまり

知りません。主に騎兵の兵隊さんと一緒に居るお馬についてゞす。けれども、なんと言つても軍隊のお馬の中では騎兵のお馬が一番はしつこくつて、一番お悧巧で――お馬でも馬鹿ばかりではありませんよ――そして一番きれいで、一番若いのです。

二、お馬のけいこ

先づお馬のけいこから始めませう。皆さんは、道で騎兵の兵隊さんが、何人も列を作つて、パッカ〳〵〳〵と走つて居るのを見たことがありませう。又、高い障碍を、首を伸ばしてヤッとばかりに飛び越えてゐる兵隊さんの勇ましい寫眞や繪を見て、すごいなーと思つたことがありませう。そして僕も乘つて見たいなと思ふでせう。若し今おぢさんが、馬に乘りたい人は手を擧げなさいと言へば、元氣な皆さんは先きを爭つて皆手を擧げるでせう。けれども、乘つてごらんなさい。直ぐに落つこちますから。

馬つて、始めからうまく乘れるものではありません。第一そばへ行くと、怖いですよ。よく馴らされたお馬はなかなか人なつこいもので、傍へ行くと鼻をクスン〳〵言はしながら、肩や胸にこすりつけて來ます。これが馴れないうちは怖いのです。それにお馬はとても臆病な、氣の小さい、やさしい動物なのです。殊にお目目を見つめられると怖がります。この呼吸が始めのうちはわからないので。切角お馬の方では、仲好しになりませう、とすり寄つてくるのに、氣味わるがつて、コラッとおこつたり、顏を見つめたりして、却つて馬を怖がらせ、暴ばれさせるやうなことがあるのです。それに今一つお馬は自分の後の方を大變怖はがるのです。お馬が蹴るのは、後の方へ何か來たなと思つて、怖がつて蹴るのです。それも、お馬のお尻のところへピッタリとくっつくやうにして後へ廻れば、お馬は、はゝこれは今自分の横に居た人が、後の方へ廻つて、お尻の蠅でも追つてくれるんだなと思つて、安心してゐます。それを始めのうちは、こちらの方がおつかなびつくりなもんですから、なるべくお馬からはなれるやうにして後に廻るといふと、ボンと蹴られて、怪我をするやうなことも度々あります。

それから馬に呼びかけるには、「ホーラ、ホーラ」といふ

のです。暴れてゐるのをなだめる時にも「ホーラ」と言ひます。近寄つて行く時に、この言葉をかけてやると、決して蹴つたりなどしません。昔は馬を勵ますのによく「ハイヨー〳〵」と言つたさうですが、今はそんなことは言はないところを見ると、あまり利き目がないのでせう。

さてこれでお馬の傍へ近寄つて行く心得がわかりました。これからいよ〳〵あぶみに足をかけて、お馬の背中に乘つかるのです。それも平氣で乘つかつてゐるといふと、お馬はおとなしくして乘せてゐてくれるのですが、少しお馬が動いたりすると、おつかながつて足をちゞめたり、首根つこへしがみついたりするものですから、お馬の方からいふと、お腹にさわつたり、人間の身體の重みが前へかゝつたりするので、さてこそと、スタコラ走り出します。そこでますます〳〵あはてゝしがみつくものですから、すつてんころりと落ちるやうな順序になるのです。

お馬は決して人を踏んづけません。お馬の前へ落ちても、器用にちやんとよけて行つてくれます。戰爭の時なぞ、敵の兵隊を踏んづけてくれる方がいゝのですが、おけいこの時は踏まれてはかなひません。なにしろおぢさんなんか新兵の時には、一日のおけいこで十五回も落ちたことがあるのですから。いち〳〵踏まれてゐた日には、今ころは皆さんにお馬のお話なんかしてゐられなかつたでせう。幸に命に別條はなかつたりしても、脚の一本ぐらゐは折れてゐたでせう。

かうしてあたらしく入營した新兵さんは、來る日も來る日も、落ちては乘り、落ちては乘り、根氣よくおけいこをつゞけます。それにお馬の背の上でトン〳〵持ち上げられたり、横ぶりに振られたりするので、大抵のものはお猿さんのお尻のやうに、まつかにすりむけます。なか〳〵らくではありません。

それでも三四ケ月もすると、すつかり馬にも馴れて、ちよつとしたことでは落つこちなくなります。この頃になるとちやんと鐵砲をしよひ、あの長い劍をつるして廣い、練兵場をドン〳〵走り廻り、馬の上から軍刀で敵を斬るけいこや、障碍を飛び越える練習や、斥候や傳令のやり方を習つたりします。もう一人前の騎兵の兵隊さんです。

こゝでちよつとお馬に乘る時の道具のことをお話しませう。先づ人が乘つかるのがお鞍です。お鞍と言つてもお伽噺にあるやうな金や銀をちりばめた綺麗なのではありません。兵隊さんのお鞍は軍鞍と言つて頑丈一點ばりに出來てゐるのです。戰爭に出たり、大きな演習に行く時には、鞍の兩側前後に旅囊、鞍囊といつて袋をとりつけるやうになつてゐます。その中には人と馬との二日分の辨當、兵隊さんのシャツ、ゾボン下のやうな身の廻りのもの、豫備鐵と言つて馬の蹄鐵――このことは後でお話します――彈藥等を入れます。その他に鞍の後には天幕や雨具をグル〳〵卷いて取りつけるやうになつて居ります。かうしてすつかり仕度をこゝのへますと、一人の兵隊さんでは馬の背中へ乘つけることが出來ない位の重さになります。十貫近くもありませうか。それに十五六貫ある人間が乘るのですから、お馬も大變なわけです。

お鞍の下には鞍下毛布と言つて、皆さんのお家にある二枚つゞきの大きな毛布、あれを八つに折つてお馬の背中に敷きます。これがないと固いお鞍で背中がすれて皮がむくれて來ます。丁度皆さんが靴下をしないでお靴を履くと、かゝとに豆が出來たり、すりむけたりするのと同じ理窟です。

お鞍は腹帶でお馬の腹をグット締めてとりつけます。皆さんがパンツをバンドで留めるのと同じです。ところが、お馬の中には腹を締めつけられるのを嫌がつて、腹帶びを締めようとすると、グーンとお腹をふくらませるのがゐます。こんなのは注意して、乘つてから腹帶をも一度締め直さないと、歩いたり馳けたりしてゐる間に、鞍の下に敷いた毛布がズン〳〵ずりこけて、知らぬ間に落つこちて失ふことがあります。兵隊さんの大變な不名譽とされてゐて、若しそんなことがあらうものなら、後でこつぴどく叱られます。ですから若し皆さんが行軍して來た騎兵の兵隊さんのうちで、鞍下毛布がベロンと後の方へずり落ちてゐるのを知らないで、得意になつて行くやうなのを見たら、注意してあげて下さい。

腹帶に就いては、日露戰爭の時にこんなお話があります。二人の斥候が前進してゐますと、ごうやら前方の小高

い山の向ふに敵が居るやうな氣配がします。そこで二人はその山へ上つて、高い所から偵察しようとしたのですが、その山が餘り急で、道もないので、馬を乘り上げることが出來ません。二人のうち一人は手綱を戰友にあづけて自分が馬を下り、徒歩でその山によぢ登ることにしました。ところが山のすそへ漸く手をかけたかかけないかに、横手の方からバン〳〵〳〵と猛烈な敵の射擊を受けたのです。そこで直ちに馬に飛び乘らうとして、片足を鐙にかけてぐつと踏み切つた途端に、腹帶が弛んでゐてお鞍がクルリッと引つくり返つた爲め、その斥候は馬に乘ることが出來ず、さう〳〵非業の最後を遂げたといふことです。又、佐々木高綱と梶原景季の宇治川先陣爭の話は皆さん御存知ですね。梶原は、馬の腹帶が弛んでゐるよと注意された爲め、氣をとられて、まんまと高綱に先陣を越されました。それほどに、この腹帶といふのはお馬に乘る人にとつて大切な、よく注意して居ねばならないものになつてゐるのです。

さて次に、お鞍の兩側からブラリンと下がつてゐるのは、いふまでもなく鐙です。馬に乘る時には、先づ左の手で馬のたて髪をつかまへ、左足を鐙にかけて、やつとばかりに跨ります。それから右鐙に足を入れます。始めの頃は、右足先きと右鐙とをよく見乍らでないと、なか〳〵足がかかりませんが、少し慣れて來ると、見ないでも足さぐりでうまくかゝるやうになるものです。

お馬の口の兩側から出てゐる二本の革紐が手綱です。手綱は自轉車で言へば、ハンドルとブレーキの役をします。これを引くとお馬は止まります。右手綱は右に向かせる時、左手綱は左に向かせる時に使ひます。それでは止まつてゐる時に歩かせたり、又ゆつくり歩いてゐる時に駈け出させたりするにはどうするかといふと、脚をグッと締めるのです。騎兵の乘つてゐるやうな悧巧なお馬になると、膝のところを一寸締めつけたゞけで、素直に歩き出しますが、それだけできかない時や、いきなり速く駈け出させたりする時に、靴のかゞとについてゐる拍車でお腹をつゝいたり、蹴つたりするのです。おぢさんがまだホヤ〳〵の新兵さんで、おつかなびつくりでお馬に乘つてゐた頃、或時何に驚いたのかいきなりパッと駈け出されたことがありま

す。おぢさんはびつくりして手綱をグン〳〵引張りますが、止まらばこそ、まるで氣狂のやうになつて駈けて行きます。おぢさんは靑くなつて、鞍にしがみついてゐました。すると後から、教官が馬で追驅けて來て、「馬鹿、拍車が入つてゐぢやないかと注意してくれました。振り落されまいと思つて夢中でしがみついてゐたので、知らぬ間に、なんのことはない、拍車でお馬のお腹をギリ〳〵押しつけてゐたのです。恥さらしはこの位にして、次に進みませう。

三、お馬の手入れ

兵隊さんはかうしてお馬の世話になりますから、乘らない時には大事にいたわつて、細かい心づかひをしてやります。始めはおつかなかつたり、又度々振り落されていまいましいと思つた馬も、毎日のやうに一緒に教練や行軍をして、苦しみも、樂しみも別ち合つてゐますと、全くお友達のやうに親しくなるものです。それに元來お馬は大變人なつこい、おとなしい動物なのです。始の間はお互に氣心も知れないので、まづいこともあつたのですが、仲好しになつて見ると、こんなに可愛いゝものはありません。兵隊さんはよく馬の手入をし乍ら、ちようど皆さんがお人形やおもちやと遊ぶ時のやうに、お馬に夢中で話しかけてゐます。そこでこんごは、どんな手入れをしてやるのか、お話しませう。

行軍や練兵から歸ると、何をおいても先づ水を飲ましてやります。お馬は一日に四度も五度も水を飲みます。夏の暑い時など人間も喉がかわきますが、どんな時でもお馬の方がさきです。それから重い鞍を下ろしてやります。そして、何といつても一番お馬がくたびれるのは足ですから、柔らかにした藁で四本の足をかはるがはるマッサージをやつてやるのです。お馬は目を細くして喜びます。これをやらないで乘りつぱなしにして置くと、かゝとの所が段々にはれて來て、終りにははしつこかつたお馬ものろまになり、高い障碍でもドン〳〵元氣よく飛び越えてゐたものが飛べなくなるのです。足の次にはお鞍の乘つかつてゐた背中をトン〳〵と兩手で叩いていあんまをしてやります。こゝの所も、長く鞍を置いて重い人間が乘つかつてゐたのですから、はれたり、お熱をもつてゐたりします。その次に、體(からだ)の汗や泥を、やはり柔かい藁やタオルで掃きとつて、きれ

いにしてやります。夏の暑い時なぞ、お馬の體から流れる汗が、かはいて、眞白い鹽がかたまつてゐるやうなことは珍しくありません。ですからタオルを何度も絞つて、時にはシャボンをつけてきれいにしてやります。お馬の中には、皆さんも知つてゐるやうに、鼻づらや、脚に、白いぶちのある可愛いのがありますが、そこのところが汗でほこりで汚くなつてゐたりすると、兵隊さんは自分のからだのやうに、やつきになつて洗つてやつてゐます。

その次は爪の手入れです。お手入れの前に、爪の話をしませう。お馬の足には指がありません。あると言へばたつた一本です。バットの先きへお椀を逆さにくつつけたやうなのが、お馬の足です。このお椀のところがお馬の爪です。

爪はやはらかいものですから、夏つぱの柔かい草の上なら構はないのですが街や固い道を重いものを載つけて歩くと、すり減つて來ます。ですから皆さんの見るお馬には、爪の先きに蹄の形をした鐵が打ちつけてあるのです。朝鮮や滿洲の氷の張つた所に行くと、この鐵に何本も釘のやうなものが出てゐます。丁度野球やランニングの時に履くスパイクのやうなものです。何のためか、わかりますね。氷の上をすべつて轉ばないやうにです。それはともかくとして、この蹄鐵が、行軍などをしてゐる途中で落ちることがあるのです。それは、いくら釘でしつかりと打ちつけたからと云つて、もと〳〵くつつけたものですから、落ちるのは何とも仕方がありません。そんな時の用意に、お鞍にくつつけた袋の中へ、別の鐵をもつて行くのです。

それではお馬に乘つてゐて、蹄鐵が落ちたのがどうしてわかるかと、皆さんは不思議に思ふでせう。そこで兵隊さんは、行軍なんかする時は、後の人が始終前の人のお馬の足を注意して、鐵がくつついてゐるかどうか、お互に氣をつけつこするのです。今度、お馬に乘つた兵隊さんの列がバカ〳〵〳〵走つて來て、皆さんの前で、ゆつくりと普通の歩調になつたやうな時に、氣をつけてゐてごらんなさい。兵隊さんは、お互に前の馬の脚の方をすかして見乍ら「前馬異常なし」といふやうなことを言つてゐますから。

ところで昼間なら「前馬異常なし」かどうかゞわかりますが、夜の眞暗い時なぞは、見えないではないかと言ふ人が

おありでせうが、そんな時には、馬でもやつぱりびつこをひきますから、ゆれ具合によく注意してゐて、お馬の歩きつぷりで知るより他はないのです。それをぼんやりして乘つてゐますと、蹄鐵が落ちたのも氣づかないで何時間も歩いた爲め、朝になつて見ると、爪がすつかりさすり減つてゐたりすることがあります。そんな時は、またこの爪が延びるまでそのお馬は乘れないことになるのです。どうです、皆さん。のんきさうに、お馬の上でバカッ〳〵歩いて行く騎兵の兵隊さんは、いゝなァと思ふでせうが、それでゐてなか〳〵心配なものだといふことがおわかりでせう。

それにお馬の爪はカラ〳〵に乾いてくるとボロ〳〵かけて落ちるやうになるのです。そこで、爪の手入れですが、お馬の傍へしやがんで脚をかゝへるやうにして、「ホーラ」と聲をかけてやると、ちやんと膝を折つて一本づゝ兵隊さんのお手々へおあづけをします。そこでていねいに水で泥を洗ひおとしてやつた上で、爪が乾かないやうに、油を塗つてやります。

そのうちに濡れたタオルで拭いた毛が乾きますから、毛並にそつてブラシと櫛を入れてやりますと、見る見るうちに毛並につやが出て來て、さきほどまで汗と砂ほこりと泥とであんなに汚なかつたお馬が、見ちがへるやうにつやつやと、そしていき〳〵として居ります。

それから、乾いた柔かい藁の寢床の敷いてある自分のお部屋へ入れてもらつて、ペコ〳〵にすいたお腹へ、お美味いごちさうを頂きます。お馬のごはんは、燕麥・大麥・小麥・トウモロコシ・高粱・藁・干草等で、お金にして一日およそ一圓見當です。この外に大好物として人參がありますが、これは皆さんで言へば先づチョコレートと言つたところでせう。大變骨折つたり、むづかしい障碍をうまく飛び越えたりした時に、御褒美に貰ひます。

その他、兵隊さんは朝起きて點呼を濟ますと、何をおいても厩へかけつけて愛馬の世話をします。「ホーラ」と言つて寄つて行くと、お馬の方も一晩別れてゐた主人の方へ、嬉しさうに顏をすりつけて參ります。そこで外へ曳き出して水をやり、練兵の後と同じやうな手入をしてやります。

（以下六十九頁へ）

に出來ない樣なら、幼稚園に行くのは止しませう、と言はれたとか、すると勇ちやんはどうしても幼稚園に行き度いので、之からは決してしないと約束をしたと云ふ事である。こんなにみんなにいぢめられても、そんなに幼稚園に來たいのかと思ふと、私はほろりとした。そしてどうかして、今までの間に他の子供の腦裡に植ゑつけられた、勇ちやんへの評價と云つた樣のものを打破すべく努力しなければならないと思つた。

この翌日、勇ちやんは別人かと思ふ程、皆と一緒には入つて來てお話も聞けば仕事もする、遊戯もする。ブー〳〵と云ふ頓狂な聲はこの日は聞えなかつた。その翌日は少し緩んで、凡ての行動がいくらか前の樣子にもどり氣味であつた。その翌日はもつとゆるんだ、でもその都度注意すると、思出した、と云ふ樣な表情をして止めるのである。

教育と言ふ事は、學校と家庭が協力してやれば效果が現はれるものである、と云ふ、世の中には珍腐な筈の事柄が、私には、今新しい生きた事實として迫つてゐる。こうして家庭と學校とが一致協力して、たしなめつゝ習慣性にまで導けば、かなりの訓練效果は揚げられるものである事を、この頃、この他の、二三の出來事でも確信づけられて居る。

―― 十二年七月 ――

（七十九頁より）

夜のうちに汚いものを踏んづけたり、その上に寢ころがつたりして汚れてゐるからです。それから朝ご飯をやります。夜も點呼がすんで寢る前に、も一度厩に行つてやります。かうして騎兵の兵隊さんの一日は、お馬と一緒に起き、お馬と一緒に暮らす一日なのです。かうしてしよつちゆう一緒に居て、仲好しの友達になつてゐてこそ、戰場へ出征して人と馬と一體となつて活動することが出來るのです。

この次はもつと〳〵面白いいろ〳〵な馬のお話して上げませう。